

2017年10月
通巻第32号
季刊 2017-IV
www.mex-jpn-amigo



発行人：上原尚剛
編集人：河嶋正之
 鴻巣勝明
事務局：笠井道彦

メキシコ歴史文化講演会 第1回

メキシコ・チアパス紀行（その1）

旧「榎本殖民地」を訪ねて

～「日墨協働会社」の学校教育の実践～

第1回講師 神田外語大学教授・会員 柳沼孝一郎

文字通りメキシコ・オパールを散りばめたかのように光り輝く、人口2千万人をゆうに超える世界有数のメガロポリス、メキシコシティの灯の海を眼下に眺めながら、夜行バスは外輪山を越えてひた走る。オアハカからフチタンなど途中いくつかの町に立ち寄りながら、3日目によりやく目的地に到着する。真夏の昼下がり、灼熱の太陽に焼かれた町は眠ったように静まり返っていた。眩暈を覚えるほど暑い。拭っても拭いても汗が吹き出る。あたり一帯はバナナやマンゴーの大樹が生い茂る熱帯地で、屈指の豪雨地帯でもある。ここは中米グアテマラと国境を接するメキシコ南部チアパス州、ソコヌスコ郡 Soconusco のエスキントラ Escuintla という町だ。チアパス Chiapas はかつて古代都市遺跡パレンケに代表されるマヤ文明が栄華を極め、アステカ王国の支配下にあった当時、一帯はアステカの言語ナワトル語でショコノチョコ Xoconochco と称し、土地の民ソクトネス族をチアパネカ Chiapaneca と呼んでいた。遙か彼方のチアパス高地にはツォツィルやツェルタル、キチェなど100万人を越えるインディヘナが暮らし、シャーマンが現世の幸せを祈ってディオス・ムンド（世界神）に敬虔な祈りを捧げる土地でもある。



日墨協働会社：共同体精神で児童教育

1897年（明治30年）5月16日、槍を先頭に、米や味噌、醤油樽を担いだ異様ないでたちの日本人集団がエスキントラに辿り着いた。コーヒー栽培を基盤とした「日本人殖民地」を、遙か彼方のメキシコの南部に建設せんとする理想に燃えた「榎本メキシコ殖民団」の一行35名である。外務大臣や農商務大臣を歴任した榎本武揚子爵が、メキシコのポルフィリオ・ディアス大統領から購入したエスキントラ周辺の64,000ヘクタールの官有地に、明治政府の海外移民政策の一環として送り込んだこの計画的な殖民団は、現在のメキシコ日系社会の礎を築いただけでなく、ペルー移民の2年前、ブラジル移民に先立つこと11年、日本人の中南米移住の先駆けとなった歴史的な出来事であった。

←榎本殖民団 上陸の様子（日墨協会所蔵）



しかし、コーヒー栽培についての知識や経験が皆無であったこと、現地の事前調査の不足、マラリアなどの熱帯病、入植地がコーヒー栽培に不適切な土地であったこと、さらには殖民地経営のための運転資金が絶たれたことなど様々な原因から、榎本殖民団はわずか3ヶ月でもろくも崩壊してしまった。メキシコに関する予備知識もまったくなく、唯一のコミュニケーション手段であるスペイン語を解せる者もなく、残された日本人入植者は、形容しがたいほどの辛苦を余儀なくされながらもそれぞれ活路を見出し、なんとか生き長らえた。各地に散っていった日本人入植者はその後チアパスに戻り、タフコ川畔に切り開いた「タフコ農場」（入植者は「多福岡農場」と呼んでいた）に集まり、協同組合として「三奥組合」を結成した。当時の宮城

目次

- | | | |
|---|-----------------|--------|
| 1.講演会報告：「旧「榎本殖民地」を訪ねて(1)～「日墨協働会社」の学校教育の実践」 | 神田外語大学 教授 柳沼孝一郎 | ...1 |
| 2.私とメキシコ：「遠藤桑珠画伯生誕100年展」を鑑賞して」 | アミーゴ会 会長 上原尚剛 | ...3 |
| 3.活動報告：「西日本アミーゴ会：活動報告」 | 西日本 幹事 出雲良治 | ...5 |
| 4.私とメキシコ：「日本とメキシコを結ぶ花：コスモス（第1回）」 | (元)玉川大学教授 稲津厚生 | ...6～8 |
| 5.「地震のお見舞い」...4 / お知らせ：「歴史文化講演会第2～4回」...8 / 活動報告：「秋季親睦ゴルフ大会」...8 / 「あとがき」...8 | | |

農学校卒の奥州（東北）出身者と三河（愛知）出身者が中心となって創設したことから三奥組合と命名された。同組合はのちに「殖民信用組合」と改称、さらにメキシコ国の商法に準拠し、チアパスの地にしっかりと根を下ろして独自の植民地を建設する目的で新たに発足されたのが「日墨協働会社」(Compañía Japonesa Mexicana, Sociedad Cooperativa) であった。

日墨協働会社は、私有財産を厳しく禁じ、社員および家族の相互扶助を唱え、とりわけ社員子女の教育の機会均等を保障する、そのための教育積立金の負担を社員全員の義務とした社会主義的な色彩の濃い共同体組織であった。特筆すべきは、誕生する日系二世の児童教育を最重視し、「学校教育」を実践したことである。教育積立金をもとに、エスキントラの隣村アカコヤグア Acacoyagua の近くを流れるシントラパ川畔に、1ヘクタールの土地を開墾して「アウロラ（暁）小学校」(Escuela primaria AURORA) を建設し、日本の師範学校を卒業したばかりの教師を招聘し、日本の教育指導要領に従い、日本から取り寄せた教科書を使って、日本語で授業が行われた。アウロラ小学校では日本語習得と修練を目的として、5歳になった児童たちを学校に寄宿させた。子供たちは一日の大半をメキシコ人の母親と過ごすために日本語を話す機会がないことを考慮したからである。学校の構内には野菜畑と「暁農場」を所有し、自給自足すると同時にそこで栽培された作物を近隣の村で販売し、その売上金で生活必需品を購入し、教師たちと寝食を共にする共同生活を送った。すべては児童たちの日本語習得のためであり、日本人としての精神教育を授けるためであった。

教師の佐藤満蔵はアウロラ小学校の教育方針と実態について、「学校に子供を収容して一大家庭を作り、家庭と学校乃至は社会という三大教育を併せ行うところの現在の有様は（中略）勤労を貴ぶ風習を作り、独立自覚の精神を養うことであり、著しく実用的であって、活動的である学校は実に自活、独立、幸福の小形なる社界である」と日墨協働会社の社報で報告している。その根幹は照井亮次郎理事の理念、すなわち「たとえ各人の利益は少なくとも人々が皆安穩に生活し、完全に児童教育をなし、日本民族の発展を百年の後に期すると云う遠大なる思想を保持せねばならぬ」にすべてが集約されていよう。照井はそのためにも、「日墨協働会社は（中略）今回更に子女を教育するの目的を以て日本より学校教師を招き候。右は同じく同会社より招かれて渡米する医師と共に既に途中にあり、到着の上はエスキントラに学校、タパチュラに病院を設くる



榎本殖民団 照井亮次郎（日墨協働所蔵）

る予定に御座候。また社員間の往復書簡は全然漢字を廃しABCを用い候処成績意外に宜しく（中略）。子女繁殖と共に一問題たるべきは教育のことに御座候。若し今日のままに放置せば日本植民地の児童は余り日本語を解せざるものとなるべく何等母国の利益とならざるべしと存候。（中略）政府は宜しく教師を海外植民地に送りて児童に国民的精神の注入を勉めざるべからず」と、児童学校教育がいかに重要であるかを説いた。メキシコ南部チアパスの一寒村で学校教育を具現しようとする日本人パイオニアたちの魂がそこにある。

アウロラ(暁)小学校の子供たち

アウロラ小学校では授業は午前7時30分に開始され、昼食（食事の仕度は女兒が担当した）をはさんで、午後3時以降の放課後は農場での労働、薪取りや家畜の世話をするという生活を送った。授業時間割は、「第2級生の算術を第1時に、読方を第2時、第1級生の算術を第3時に、読方を第4時、午後は全生徒の混成教授として2時間授業」という、15分の休み時間を入れ（正味授業時間は45分）、毎日6時間の授業を行い、年長者は年少者の世話をすることが厳しく教育された。また、児童の個性に重きを置く教育方針を打ち立て、児童各自の知能発達あるいは習熟度に応じて適宜進級させる方法も採られていた。教員の宮崎関尾は、「深く感に打たれたのは、児童の行動、言語、作法、風習、善く働き、よく遊ぶという点においては、日本の児童のそれよりはるかに、数歩越えている」と日墨協働会社の報告書に記している。まさに日墨協働会社の基本理念である共同体精神が学校でも体現されていたのである。

当時、アウロラ小学校に在学していた児童は、山本太郎、有馬一男 (Onésimo José)、有馬勝男、山本次郎、清野エステバン (Esteban Kiyono)、清野エルネスト (Ernesto Kiyono)、清野芳丸、清野芳子、清野玉子、三谷一茂、鈴木正義、堀田ビダル (Bidal Hirota)、堀田イサク (Izac Hirota)、照井一郎 (José Ichiroh Terui)、照井敬亮 (Roberto Terui) など、日墨協働会社社員の子供たちであった。

日墨協働会社は、教育書、歴史、地理、科学、日本語辞典、外国語関係の図書など500冊を超える書籍を独自に取りそろえていたが、当時の日本の尋常小学校で実際に使用されていた教科書を日本から取り寄せ、当時の日本の教育勅語や修身にそった学校教育、すなわち、当時の日本の思潮や国家教育がそのままアウロラ小学校で実践されていたのである。さらにユニークなのは「ローマ字教育」を実践したことである。メキシコで生まれ育つ二世の子供たちが、日本とメキシコの両国を祖国と定め、日墨両国の文化を理解し、将来において両国の架け橋となるべく子供たちに教育を授けるためであった。そして、漢字の煩雑さを考慮し、ローマ字による流暢な日本語の習得と他の外国語学習を考えてとくに児童たちにローマ字教育を導入した。

<その1了>

「遠藤桑珠画伯生誕100年展」を鑑賞して

アミーゴ会 会長 上原尚剛

去る6月24日から7月23日まで山形県米沢市の上杉博物館に於いて、アミーゴ会のメキシコ代表遠藤滋哉さんのご尊父で山形出身の日本画家として著名な遠藤桑珠画伯の生誕100年を記念した作品展が開催されました。

遠藤桑珠展：「大地に立つ 空を仰ぐ」

米沢が生んだ日本画の巨星と称えられる遠藤桑珠画伯についてその略歴を見ますと1917年に現在の米沢の農家に生まれましたが、幼少の頃から絵を描くことが好きで周囲の反対を押し切って家業の農業を継がず、将来は画家を目指して地元で絵の修行に励みました。1937年に平安時代から続く大和絵の主流“土佐派”の流れを汲む日本画家で日本美術院の中村岳陵に師事し、更なる研鑽を積みますが、1940年には召集されて満州に出征、1943年には帰国するも、当時は戦争で絵を描く様な世時ではなく、本格的に絵の修行を再開するのは戦後からでした。

そして1946年に院展で初入選した後、次々と入選を果たして正式に画家としての活躍が始まり、その後中村岳陵が院展を離れ日展に転じた事から、桑珠画伯も日展に転じ以後数々の作品が日展で入選する好成績を重ね、押しも押されぬ画家としての地歩を固められて、2011年12月に94歳で亡くなるまで画壇の重鎮として活躍されました。

その間1967年には台湾やヨーロッパへの取材旅行に出掛けられ、1974年には初めてメキシコに取材旅行に出掛けられ以後計10回メキシコを訪問されています。このメキシコ訪問に就きましては後述しますが、「従来私の考え方を大きく変えていった」と画伯は述べて居られます。

私は遠藤滋哉さんから予て画伯に就いて種々お話を伺っていたのですが、作品にお目に掛かる機会がない事を大変残念に思っていた処、今回はメキシコを題材にした作品も数点展示されていると聞き、この作品展を見逃してはならないと絵画の好きな家内を連れ、7月9日アミーゴ会の笠井事務局長共々米沢に赴きました。

上杉博物館は米沢市丸の内一丁目と言うその住所でもお分かりの通り、市の中心部で上杉謙信を藩祖とする上杉藩の城跡内に建てられた立派な博物館です。駅から直行した私達は、滋哉さんからご紹介頂いた主任学芸員の遠藤友紀さんのご案内で早速展示会場に入りました。

会場には桑珠画伯の作品が製作年順に(1)画家になる……師・中村岳陵入門～院展時代(2)日展作家への道、(3)異国との出会い、(4)雪国と故郷、そして(5)空と雲、の5部に分けて40点が展示されていました。順番に拝見しながら進みましたが、一辺が2メートルを超える大作が多くまさに圧倒されました。



メキシコとの出会い：空と雲へ

メキシコを題材にした作品は(3)の「異国との出会い」の中に7点出展されていて、そのすべてがメキシコを知る者にとっては感激と郷愁を呼び起こすものでした。その7点全てをお見せしたいのですが紙面の都合で、何れも上杉博物館が所蔵する3点のみ博物館と遠藤家のご了承を得て掲載させていただきます。

先ず「遺跡の火」(1981年 156.0x213.0)はユカタン半島のチチェン・イツァの天文台を背景に夕闇の中燃え盛る火を描いたものですが、私はこの絵を見た瞬間息を飲む程強烈な衝撃を受けました。マヤの神事を想起させる極めて珍しい神秘的な情景で、画伯がマヤ文明から受けた神秘性をこの絵で表現されたのではと思わざるを得ませんでした。



次の「草原の虹」(1981年 214.2x160.2)は草原の上に架かる虹を描いたものですが、図版の解説によると雪国生まれの桑珠画伯にはメキシコの明るい空は特に印象深いものだったに違いないと、この絵にはその感動が率直に表現されているとしています。

3枚目の「雲と地平」(1982年 159.8x212.0)は、水平線を極端に下げて画面の大半を空にして遮る事なく続く空は却って大



地の広大さを感じさせると解説し、画伯の晩年の空と雲に引き継がれるテーマだとしています。



この絵については滋哉さんから、「取材場所はメキシコ中央高原のメキシコで4番目に高いネバード・デ・トルーカ山の麓の高原で、手前にマゲイ（竜舌蘭）が自生していて、20羽余の雁の群れが巣に帰るところだ」とのご説明を頂きましたが、そのマゲイも雁の群れも実に丁寧に細かく描かれていて、画伯にとっては当然だった絵に対する厳しい心構えに改めて大変感動しました。更にこの絵は1984年頃、日展からの要請で、中曽根首相時代、約一年間首相官邸に貸し出され掲額されていた由です。

前に述べました様に、桑珠画伯のメキシコ訪問は前後10回に及びます。画伯は2011年12月26日に94歳で亡くなりましたが、生前それまでの人生を振り返って『生い立ちの記』を残されて居り、その中に「メキシコ 一つの国」と言う項目があり、画伯のメキシコでの印象を記して居られます。これに就いては2012年の「アミーゴ会だより7月号」に、滋哉さんが「メキシコの神に思う」と題して寄稿されていますのでお読みになったと思います。繰り返しになりますが、桑珠画伯はメキシコでの「前後合わせて200余日のメキシコ滞在中の見聞と実際に経験した生活とを考えて見ると、欧州諸国のどこの国にもないメキシコ独特のまさに稀有とも謂うべき生活文化の多くに接したことである。自国日本では到底味わい得ない驚異の数々であった。（これは従来の私の考えを大きく変えていった。）」と記されています。メキシコの文化、メキシコ人の生活様式、ユカタン半島のマヤ遺跡、広大な平原と青い空に湧き上がる雲等大自然にも大きな魅力と衝撃を受けられ、これら3点を含む今回の展示作品にはそれが大きく反映されているのが強く感じられました。

「異国との出会い」の次の(4)「雪国と故郷」は、画伯の郷里の山形県を中心に近隣の宮城県や新潟県に題材を求めた雪景色を中心に冬の厳しさを描いた大作8点が展示され、画伯の故郷を想う心が見る者に伝わって来る感じを強く受けました。

そして最後の(5)部、「空と雲」では地平上に湧きたつ雲と空を描いた大作が7点展示されていました。何れも1998年以降に描かれた作品ですが、見た瞬間にメキシコの「草原の虹」と「雲と地平」を思い出すほど構図が良く似ていて、画伯のメキシコでの自然の印象が消える事無く胸中に残っていたに違い無いとの

感じを更に強くしました。

全てを鑑賞させて頂いた後、絵画に対しては私よりも思い入れが強い家内も心から感動し、「美しくも厳しい大自然に囲まれた山形で誕生され、幼少より感受性豊かであられたであろう桑珠画伯は、その自然の姿に魅了され、一生をかけてそれを描きたいと画家を目指されたのではと思います。選び抜かれ混ぜ合わされた岩絵具の独特の美は、無駄を削り取ったデッサンからの構図、そこから生まれたモダンな画風等に接し正に感激のひとつでした」とその感激の気持ちを述べています。

前述の通り桑珠画伯は1974年以降10回もメキシコを訪れて居られますが、私は1966年から73年までと1981年から87年までの二回に亘って計13年メキシコに居ましたが、画伯にお目に掛かる機会が無かった事を未だに大変残念に思っています。

また長年に亘ってこれだけの名作、大作を描き続けられた画伯ですが、それには何時も蔭ながら画伯を支え続けられた奥様ナナ子様の内助の功が大きかったに違いなく、そのご尽力に対し心から敬意を表したいと思います。

こうした感慨に耽りながら、嘗てアメリカのケネディ大統領が就任時に尊敬する政治家として挙げた上杉鷹山の町・米沢の雰囲気に触れつつ博物館の周りを散策し、名産のサクランボと銘酒を土産に、また機会があれば再度訪れたいとの思いを胸に、後ろ髪を引かれる思いで帰途に着きました。<了>

【編集部注】

①米沢市上杉博物館のウェブは下記の通りです。

<http://www.denkoku-no-mori.yonezawa.yamagata.jp/uesugi.htm>.

②上杉博物館所蔵の遠藤桑珠作品は下記の「収蔵文化財総合データベース」で公開されています。お楽しみください。

http://www.denkoku-no-mori.yonezawa.yamagata.jp/togodb/database_top.php.

③遠藤桑珠「メキシコの神に思う」(アミーゴ会だより2012年7月号所収)：http://docs.mex-jpn-amigo.org/AmigoNews_1207.pdf



このたびのメキシコで発生した数度の大地震で犠牲になられた方々に謹んで哀悼の意を表すると共に被災された皆さまには心からお見舞いを申し上げ一日も早い復興をお祈りいたします。

2017年9月

メキシコ・日本アミーゴ会

西日本アミーゴ会：活動報告

西日本幹事 出雲良治

新梅田シティ・ワンダースクエアで行われる、フェスタメヒカーナ大阪に合わせて、西日本アミーゴ会を本年も同会場レストラン「四季彩」にて、9月9日(土)に会員・知人含め33名の多数の参加を得て開催しました。当日は2部構成となり、先ず1部では鴻巣勝明さん(副会長)の講演を1時間拝聴し、そして引き続き2部の懇親会で大いに盛り上がりました。

「メキシコ50年、あれこれ、よもやま話」



鴻巣さんは1966年8月の利光松男様(当時JALメキシコ支店長)との羽田での出会いから、メキシコに行くことになり、ロスからメキシコに行く機内でメキシコ人の男性から「スペインのスペイン語(Castellano)は話さない方が良い」というアドバイスを受けた。まだスペインからの移民一世が何かと勢力を持っている時期でもあったのでしょう。さらにメキシコ人がガチュピンと蔑称されていた時代なので、メキシコ・スペイン語(Español)ではなくCastellanoで喋るとメキシコ人は良い印象を持たないという。過去の征服された歴史からくるメキシコ人のメンタリティーの複雑性が今も残り、被征服の歴史は簡単には消えないことを実感したという。

メキシコ市は海拔2,230メートルにあり、かかる高地に住む生活の知恵から来た習慣の例として、食事は朝・晩は軽め、昼はゆっくり量を摂ること、そしてエグゼクティブは往々にして昼食が夕方まで続くことなどを面白く紹介。

メキシコは戦後から1970年代までは高度成長期、しかし80年代は一転経済危機。その苦しい時代だけでなく、豊かな時代を体験できたことが大変良かったという。往時は1ドル=12.5ペソの固定で、サラリーマンの昼食代が丁度1ドル程度の時代(今は4~5ドル)。ペソ高時代で世界中からアーティストも多数来墨していた。

1971年には日墨間のJAL直行便DC8機が週3便就航し、翌年にはジャンボ機が導入された。JALでの仕事も一段落ついたため、その後はメキシコ観光(1968年設立)に移り、責任者として尽力。そんなメキシコ生活のまとめとして、「あフォー(ajo=ニンニクではありませんよ。「あ4」です)」が大切であるとして、「1、あわてず。2、あせらず。3、あきらめず。4、あてにせず」という言葉で締めくくられました。

随所にユーモアを交えたお話を楽しく拝聴させていただきました。1964年東京五輪と1968年メキシコ五輪の間にメキシコに行かれたのも、その後の両国との長いつながりを暗示していますね。マイク無しで一時間も話していただきまして、誠に有難うございます。益々のご健勝をお祈りいたします。

懇親会：語る！飲む！食べる！歌う！

鴻巣さんの乾杯の音頭でスタート。お酒が入ると各テーブルでメキシコの話で盛り上がり一気にヒートアップ。毎年出演をお願いしていて、すっかり定着した行岡京子さんのギターと歌のコーナーでは「Memorias de una vieja canción」他二曲を熱演いただいた。続いて2008年からソロのライブ活動をされている桜井顕一さんが「アルディラ」「ナタリー」「ヴォラレー」そして「愛の讃歌」を熱唱された。また80歳で元気に合唱活動を続けておられる、会員の渡邊正明



さんが「La Golondrina」を披露された。当日たまたま80歳の誕生日を迎えられた出席者の木下満蔵さんを祝い、全員で



9月9日 満80歳の誕生日を迎えられました。誕生日おめでとうございます。
¡Feliz Cumpleaños!



誕生日を迎えられた出席者の木下満蔵さんを祝い、全員でハッピーバースデーソングを歌い、宴は最高潮

に。そして、みなさんの強いリクエストで「シエトリンド」を、行岡さんにアドリブ演奏していただき、全員で歌いました。「Ah..ya..ya..ya」この曲を歌わないと終われませんよね。こうしてあっという間の二時間が楽しく終了しました。

東京からご参加の鴻巣さん有難うございました。また、多数ご出席いただいた皆様、楽しい懇親会を盛り上げていただき感謝申し上げます。来年もまた元気にお会いしましょう。¡¡Viva México!! <了>



メキシコと日本を結ぶ花：コスモス

第1回：私がコスモスの原産地メキシコにたどり着くまで

会員 元・玉川大学教授 稲津厚生

秋の風物誌として日本各地で親しまれている花：コスモス（キク科の園芸植物、別称秋桜。英名は Common Cosmos）は、日本の風土および日本人の心と、あまりにも一体化しているために、地球の裏側の国：メキシコを原産地とする花であるという真実を述べても「えっ！意外！」という反応が返ってくるのが少なくない。コスモス、および園芸植物（＝花）として栽培されているコスモスの仲間（分類学では「コスモス属」という）であるキバナコスモスやチョコレートコスモスの原産国は、メキシコである。

ここでは、まず、筆者とコスモスの見合い結婚と結婚によって何が生まれたかをご紹介します。

コスモスとの見合い結婚

今では定年で退職してからすでに 10 年近くが経過したが、玉川大学の大学院並びに農学部勤務の折の教育・研究の主たる担当分野は植物育種学であった。そのなかでも観賞植物（一般に‘花’と云い、専門用語では‘花き＝花卉’という）を対象とする領域を扱い、多くの花の種類の中でも特にコスモスを、また植物が持つ多様な性質の中でも別して花の色や形を対象とする研究活動を基盤として、大学教員としての職務を勤めた。

ところで「育種学」といっても、「それって、何？」と思われる‘アミーゴ’が少なくないのではないだろうか。日本における最初の育種学の定義には「新品種育成に関する理論およびその応用学、正確に言えば品種育成学である（明峰 1912）」とあり、その理念は今日も継承されている。それらを踏まえて、私なりに補充して述べるならば「育種学は、作物、家畜や有用微生物の品種改良を促進するとともに、‘改良品種’という文化財の適切な維持・管理に関する学問。さらに、何時、どこで品種改良に役立つことになるかは未知であっても、有用となる可能性が認められる未利用生物資源の探索・保護・利用法に関する研究も含む。」となる。

花の種類は多いのに、「研究対象は何故コスモスなのか？」—私の場合、その答えは「先生がコスモスの研究者だったからです」となる。私が玉川大学農学部（応用昆虫学、主にミツバチ科学を専攻）を卒業したのは 1965 年 3 月で、以後の 6 年間は玉川学園傘下の高等学校 2 校（東京都町田市および鹿児島県坊津町）において、主に理科教育やフットボール部（ラグビーおよびサッカー）の指導を担当した。1971 年 4 月に、学校法人玉川学園内の人事異動で坊津町から町田市に戻り、農学部育種学研究室助手として勤務することになった。

この研究室の当時の教授が‘私の先生’故佐俣淑彦先生であった。先生は、1965 年に玉川大学に赴任される以前に、研究テーマ「八重咲コスモスの育成」で日本育種学会賞を、また「コスモスの花型および花色の発生遺伝学的研究」で朝日学術奨励賞を受賞され、コスモス博士として世に知られていた。僭越ながら私が総括すると、先生は、学問としての花の育種学と、実業としての花の育種との調和的發展に貢献されたことにおいて、我が国における先導的な碩学の一人であられた。この先生にお会いするまでは育種学研究の経験が全くなかった私であったが、先生に研究室の一員として温かく迎えていただき、お勧めを受けてコスモスの

研究、とくに花の色素の遺伝学的研究に基づく花色育種の研究に着手した（花色の多彩化は、一般に花きの利用価値を高める）。私はこの経験を「佐俣先生を仲人とするコスモスとの見合い結婚」と自ら述べてきた。

結婚によって生まれたもの

それでは結婚によって誕生したものは何か、思い当たる主要な事項を、以下に列挙する。

【誕生物語①】 佐俣先生が玉川大学において特に力をそそがれたのが、黄色いコスモスの育成研究であった。コスモスが原産地のメキシコからヨーロッパに渡って栽培されるようになったのが 18 世紀の末、それから 150 年の間に育成された花色は、野生原種の桃色に加えて、紅色および白色の範囲に限られていた。先生は 1957 年に、当時勤務されていた東京大学の農場で、紅色花の一部が黄色を発色する変わり者の一株を発見し、その黄色を花の全体に広げ、濃くする研究を開始した。変わり者の子孫を育種学の理論を駆使して、目標に向かって根気よく管理して世代を重ねた結果、約 25 年間の春と秋の更新で 50 世代を経た 1980 年代前半には、花色が黄色に均一化した世界初のコスモスの集団が育成されるに至った。



玉川大学開発のイエローガーデン

玉川大学以外には存在しないこの黄色コスモスの花色と花の色素の遺伝学および育種学の研究に従事していた私が、佐俣先生から「学位論文を目標にして研究を促進して、そろそろ取りまとめるように」とのご指導を受けたのは 1983 年であった。が、論文原稿の端緒すら開かれていなかった翌 1984 年 6 月に、先生はご逝去された。佐俣先生の後任教授として赴任された中島哲夫教授（東京大学名誉教授）のご指導の下で玉川大学大学院に学位論文を提出し、審査を経て学位が授与されたのは、1991 年 9 月のことであった。論文のタイトルは『コスモス (*Cosmos bipinnatus* Cav.) におけるイエロー花色品種の成立に関する生化遺伝学的研究』である。これが象徴的な論文ではあるが、そのほかにもコスモスの品種改良や新品種の利用に関する研究論文、一方ではコスモス以外の花の種類についても花の色の発現に関する遺伝学＋色素化学に関する論

文の発表によって、微力ながら専門分野の学術発展の一端を担うとともに、国内、海外に学術上の友人が生まれた。

【誕生物語②】 玉川大学農学部の教員として在籍したのは、1971年4月～2008年3月の37年間であり、その間多くの学生諸君と学術研究体験をとにした。

すなわち私の研究といっても、学生諸君の卒論研究としても行われたものが多く、私が論文として公刊したり学会において講演発表する際の内容に学生諸君の実験結果やアイデアが含まれている場合には、当然共著者もしくは共同の演者として加わってもらった。その中にコスモスをテーマとした論文・発表が多く含まれることは言うまでもない。こうした「^{していどうぎょう}師弟同行」によって親密になった諸君が卒業して、様々な分野で活躍してくれていることは誠にうれしい。育種学と種苗業界（いわゆる種＝タネ屋さん）とはもともと縁が深く、育種学会に行くとタネ屋さんで研究開発を担当している卒業生の発表を聞く機会も多かった。また条件が許せば、タネ屋さんの研究農場で目を見張る新品種の数々を見て勉強をさせてもらった。これとは別の種類の交流（卒業生自身と進路の多様性からくる相違）も念頭に置いて総じて云えば、卒業生は教員の宝である。宝を生み出したなどと言えば、僭越であるが、長く続いた卒業生との縁・絆には感謝したい。

【誕生物語③】 私たちが遺伝・育種学的研究の材料としたコスモスから派生した系統（共通の性質をもつ特徴的な集団）の中には、新花色をもつ園芸品種として有望と思われるいくつかの系統が認められた。最も早くから注目されたのは、佐俣教授が生前に「(変異体＝変わり者の発見から)25年後の今日ようやく(中略)黄色のコスモスの育種に成功した」(雑誌‘遺伝’1983年11月号)と述べた系統であり、この系統は1987年に世界初の黄色コスモスとして「イエローガーデン」の名称で品種登録された。この場合の品種登録制度は、育成された植物の新品種を商業的に利用する際に、育成者の権利が適切に保護されることを目的とする制度で、同時にこの制度によって植物の品種改良が促進されることへの期待が含まれる。

すべての登録品種が販売されるわけではないが、‘イエローガーデン’の場合、登録の翌年に当たる1988年から種苗会社2社（サカタのタネおよび第一園芸）を拠点として種子が販売された。その結果、契約に基づいて、登録者である玉川学園および育成者としての玉川大学教員に対して、種苗会社からは年間の種子売上高に応じて特許権料が支払われた（法的に定められた有効期限がある）。

続いて、同様の運命をたどった（ただし登録者と販売の拠点はサカタのタネ）4品種があるが、それらを大学キャンパスの農場で誕生したことに因んでキャンパスシリーズと総称し、2002～2007年に順次登録された。該当品種はイエローキャンパス（明黄色花）、オレンジキャンパス（桃黄色花）、イエロークリームソンキャンパス＝後のクリームソンキャンパス（濃紅色＋黄色花）、ディープレッドキャンパス（褐赤色花）である。

大学の研究室の主たる存在意義は、優れた研究とその発表、およびそれぞれの専門分野の人材育成を通じて社会に貢献することにある。従って育種学研究室に

おいても新品種の育成自体は主要な目的ではないが、独自に、また産学協同によって、いわば副産物的に新品種が誕生することは、研究の方向性をチェックする意味でも、またスタッフの意欲を高めるうえでも歓迎すべき誕生物語であったと思う。

【誕生物語④】 世界初の黄色いコスモス‘イエローガーデン’は、1988年以降、日本人のコスモス好きに支えられて、たちまちのうちに日本全国に広がり、花壇用、鉢花用、切り花用として利用された。またコスモスでは、公園、休耕田、スキー場等の大規模な修景植物としての利用も盛んである。イエローガーデンを最初に修景植物として植栽することをチャレンジしたのは東京都立川市・国営昭和記念公園であった。

そこで同園に照会したところ1988年が最初、という記録が残っていた。実は昭和記念公園では、前年に当たる1987年からコスモスの修景栽培を始めた。その際の品種は、コスモスの品種として当時（そして恐らく今日でも）最もポピュラーな品種：センセーションミックス（センセーションとは7月中旬播き→9月中旬開花の早咲き品種のこと。ミックスとは、花色が桃、紅、白の単色花の株、および桃、紅、白を要素とする模様花の株の混合集団）。どうも、翌1988年はセンセーションミックスとイエローガーデンのタネを混合して、7月中旬に一斉に播いたのではないか。後者の成長は遅く、開花も1か月以上遅い10月20日頃から始まる。この生育特性の違いから、センセーションミックスは順調に育ち、イエローガーデンはみすぼらしい状態で開花期を迎えた。一方公園では「今年は世界で初めての黄色いコスモスが咲く」と宣伝していた。「困った！」ということで玉川大学に相談があり、急遽大学の農場で開花期を迎えた研究用イエローガーデンの一部を昭和記念公園に寄贈して、難局を克服した。

いわば、私の見合い結婚もかかわって誕生した娘：イエローガーデンが学外デビューの際に遭遇したピンチを救済した、ということか！ 次年以降はイエローガーデンだけを播く区域が設けられ、大学生まれのコスモス品種が同公園の秋の名物になって久しい。1998年にはオレンジキャンパスが、また1999年にはイエローキャンパスが、それぞれ品種登録の完了前であったにもかかわらず、関係者の好意により、同公園でデビューした。

なお2017年の同公園における植栽面積は、全コスモス属が22,000㎡、そのうち黄色いコスモス（イエローガーデン＋イエローキャンパス＋他の改良品種）が5,700㎡、一方キバナコスモスが5,500㎡とのこと。

何時でも、何処でも、大学農学部の師弟同行から



国営昭和記念公園のイエローキャンパス

育成されたコスモスに出会うことは喜びであるとともに、関係者を思い出して心が引き締まる。そのような心の豊かさを産み出してくれたコスモスとの見合い結婚に感謝する。

オラ メヒコ

学問としてであれ、産業としてであれ、花きを含む作物の育種に携わる者は、多くの場合いきなり野生原種を材料にして仕事を始めることはなく、育種の操作が加えられた先端品種を主な素材として仕事をする。ただし、身の回りに既に原種のコレクションがある場合には、原種の有用形質（例えば先端品種にない耐病性）とその遺伝子の利用研究に従事するかもしれない。

一方、育種学と育種に携わる者の多くを刺激する潜在的な願望として、自分が携わっている作物の原種を自生地で見たいということがある。その理由は？ 一つには自分が一体化している作物とともに故郷に帰る（帰郷の）願い、また他には、原種までたどれば新たに有用形質とその遺伝子に巡り合えないかという（資源探索の）望みが関係するのではないかと。私たちは、いつでも素材の多様性を求める。さらには原種を自生地で見ることによって先端品種の優秀性を確認して安堵する気持ちもあるのかもしれない。



秋の空とイエローガーデン(後方はオレンジキャンパス)

私において、上記の願望を満たす旅＝結婚相手：コスモスの故郷メキシコへの里帰りに同伴する旅が初めて実現したのは、2006年9月のことであつた。当時も私が勤務していた玉川大学農学部古い卒業生（1976年卒）でメキシコ在住の川南 泉さん（メキシコ州テスココ市で日本料理店を経営）と真理子さん（テスココ市に本拠地があるチャピング自治大学日本語教

師）の夫妻がいる。二人は、ともにコスモス博士、佐俣先生の教え子であるから、私とは先生のきょうだい弟子の関係にある。夫妻には、前もって「ダーウィンの進化論に関わる科学史研究と自然遺産の保護・利用に関するガラパゴス諸島（エクアドル共和国）視察」の帰りにメキシコ合衆国に立ち寄るので、私を野生コスモスに引き合わせてくれる人を紹介してほしいと依頼した。その結果「コスモスとその仲間（コスモス属）の野生原種に関する植物資源学的調査研究」の見通しが立った。そこで、コスモス属の中でも特にチョコレートコスモスの研究者並びに育種家兼栽培農園経営者である友人（三重県伊賀市在住）の奥 隆善さんを当該「調査研究旅行」に誘ったところ、快く同行してくれることになったので、メキシコシティの空港で川南夫妻と奥さん、稲津が出会う旅行計画を立てた。

その際のメキシコ滞在期間は9月10～16日の足かけ1週間であつた。川南夫妻が紹介してくれた現地における調査研究の指導者はチャピング自治大学の花き園芸学教室のメヒア教授およびエスピノーサ教授であつた。お二人のご案内で、コスモスやメキシコの国花＝ダリアが栽培されている大学の研究・実験圃場（標高2,400m。栽培されているコスモスを見ることは、メキシコでは極まれ）や国際とうもろこし・小麦改良センター（メキシコ市郊外の国際的に著名な品種改良・農業生産の研究機関。ここでも雑草としての野生のコスモスが生えていた）に加えて、標高1,600～2,600mの範囲の市街地および周辺の休耕地や自然植生地を巡って、野生コスモスとその仲間を精力的に観察した。

野生コスモス（基本的には桃色花）の群生状態や大群落に遭遇して大感激であつたが、それらの詳細およびコスモスを仲立ちとする日墨交流については、改めて……。ここまでは、新入会員の自己紹介的な内容が多くて恐縮です。＜第1回了＞

【編集部注：掲載写真は筆者のご尽力により玉川学園・玉川大学および国営昭和記念公園のHPより転載をご許可いただきました。また同公園では10月26日まで「コスモスマつり2017」を開催中です。ご家族お揃いで秋の一日をお楽しみください。】

お知らせ **メキシコ歴史文化講演会**

メキシコ日本移民120周年を記念して「メキシコ日系移民の歴史とその活躍」を主テーマに連続講演会を開催中です。第2～4回の概要を下記します。会場はメキシコ大使館別館5階。時間は18:00～20:00。お申し込みはinfo@mex-jpn-amigo.orgまで。（第1回は終了）

第2回：10月24日(火)

「チアパスに入植した榎本移民と榎本武揚について」

講師：山本 厚子（やまもと あつこ）さん

第3回：11月22日(水)

「戦後メキシコ日系社会の動向と変容

～日本のパートナーとしてのメキシコ～」

講師：浅香 幸枝（あさか さちえ）さん

第4回：12月7日(木)

「私がメキシコから学んだこと」

講師：黒沼 ユリ子（くろぬま ゆりこ）さん

皆さまのご出席をお待ちします。各回の詳細はアミーゴ会HP (http://docs.mex-jpn-amigo.org/mex_history_2017.pdf) を参照。

活動報告 **アミーゴ会秋季親睦ゴルフ大会**

9月4日に湘南カントリークラブで会員19名参加で行われました。午前中は小雨でしたが午後から快晴となり、皆さんと楽しい日を送る事ができました。優勝は上原会長杯を二階堂美房氏が取られました。ベストグロス日は笠徹氏が高齢にもかかわらず素晴らしプレーでゲットされました。次回は来年の4月を予定しています。ゴルフ大会幹事 南郷茂伸



あとがき：地殻変動の累積で環太平洋造山帯が覚醒し噴火や地震が多発。地球史は温暖と寒冷との繰り返しで人類は気候激変の時代を生き延びたと『人類と気候の10万年史』。同書は諸説紛々のマヤ文明崩壊因も古気候学で説明。読書の秋にお勧めの一冊。9月、高瀬寧・新大使がメキシコに着任。折々のメキシコ報告も期待大!!【20170930 か】